令和2年度　重要文化財公開

琉球王国のグスク及び関連遺産群世界文化遺産登録20周年記念

首里城京の内跡出土品展

発掘された倉庫跡

20TH ANNIVERSARY

令和3（2021）年1月26日（火）▶ 3月21日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

目　次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
首里城跡と世界文化遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
京の内とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
展示概要・用語解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
倉庫跡の検出①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
倉庫跡の検出②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
火災の痕跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
復元された陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
陶磁器の観察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
倉庫跡に迫る！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
コラム　－京の内出土の大龍柱の破片ー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
重要文化財指定基準・重要文化財指定の名称と指定理由・・・・・・・・・・・・・・14
重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・15
首里城京の内跡関連年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
主な引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

【凡例】

1. 本図録は、令和２年度重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展ー発掘された倉庫跡ー』（開催期間：令和３年１月 26 日～３月 21 日）の展示を補完するものとして、編集・作成しました。
2. 展示会企画は、大城妃左緒が行いました。また、原稿執筆は、金城亀信・玉城 綾・荻堂匠美が行いました。
3. 本誌掲載写真は、過年度の記録・保存用写真ほか、資料撮影を伊禮若奈が行いました。また、本誌編集・イラスト等は、亀島英莉が行いました。
4. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。
5. 発掘調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものが存在します。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

首里城京の内跡の発掘調査は、平成 6(1994) 年度～ 9(1997) 年度にかけて実施されました。平成 6 年度の調査では倉庫跡 (1459 年の火災で焼失) を検出し、14 世紀中頃から 15 世紀中頃の中国・東南アジア・日本で生産された膨大な量の貿易陶磁器が出土しました。

これらの陶磁器はアジア諸国との交易によって独自の歴史・文化を形成した琉球王国の栄華を示すだけでなく、世界でも報告例のない「元青花八宝文大合子」や元末明初 (14 世紀後半) の「紅釉水注」といった貴重な資料も見つかるなど、我が国の歴史上、意義深く、かつ学術的価値の特に高いものとして、共伴出土した金属製品やガラス玉とともに、平成 12 年 6 月 27 日付で国の重要文化財（考古資料）に指定されています。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、これらの資料を適切に保管・管理し、開所した平成 12(2000) 年以来、国指定重要文化財公開「首里城京の内跡出土品展」を 18 回にわたって開催し、多くの県民の方々に期間限定で公開しています。

また、今年度は首里城京の内跡出土資料が国指定重要文化財に指定されてから 20 年、さらに首里城跡を含む 9 つの資産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、ユネスコの世界文化遺産に登録され 20 年という記念の年でもあります。

そこで今回の企画展では、首里城跡の世界文化遺産登録について触れるとともに、貴重な陶磁器が出土した倉庫跡に初めて焦点をあてました。新たな視点で本展をご覧いただき、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対する皆様のご理解がより深まるとともに、本県の文化財の魅力や価値に興味を持つきっかけとなれば幸いです。

令和 3 年 1 月 26 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長　瑞 慶 覧　勝 利

首里城跡と世界文化遺産

平成 12(2000) 年 12月に開催された第 24回世界遺産委員会において世界文化遺産として「琉球王国のグスク及び関連遺産群」〔9資産：今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・首里城跡の5つのグスクと特別名勝 識名園および園比屋武御嶽石門・玉陵・斎場御嶽の4つの関連史跡等〕が登録され、今年度(2020年度) で 20周年を迎えました。登録には下記6つの「登録基準」(2001年現在) のうち(ii)(iii)(vi) の3つの登録基準が適用・評価されました。

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、記念工作物・遺跡・文化的景観から構成され、いずれも琉球が統一国家へ始動し始めた 14世紀後半から、琉球王国が成立した後の 18世紀末にかけて生み出された琉球独自の特徴を表す文化遺産です。これらの遺産が世界遺産に登録されたことは、東アジアや東南アジアに雄飛して琉球王国を築き、独自の歴史と文化をはぐくんできたことが世界的に高く評価されたからです。

世界遺産 (文化遺産)の登録基準

(世界遺産委員会「世界遺産条約履行のための作業指針」より、文化庁仮訳。2001年現在)

(ⅰ)人類の創造的天才の傑作を表現するもの

(ⅱ)ある期間を通じて、又はある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの

(ⅲ)現存する、又は消滅した文化的伝統又は文明の、唯一の又は少なくとも希な証拠となるもの

(ⅳ)人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建築物群、技術の集積又は景観の顕著な例

(ⅴ)特に、回復困難な変化の影響下で損傷されやすい状態にある場合における、ある文化(又は複数の文化) を代表する伝統的集落又は土地利用の顕著な例

(ⅵ)顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰又は芸術的、文学的作品と、直接に又は明白に関連するもの

世界文化遺産に登録された首里城跡ですが、令和元(2019) 年 10月 31日未明に首里城内で発生した火災によって 30数年かけて復元された正殿を含む7つの建造物が消失し、県民をはじめ世界中の人々に衝撃を与えると同時に大切な財産を失いました。この火災により首里城正殿建物の土台となる基壇跡の一部が部分的に公開されましたが、琉球石灰岩の石積み遺構への延焼が認められました。しかし、地下に残されている遺構全体からすると一部であり、世界文化遺産への影響は大きく損なわれることはないと考えられています。これは首里城跡を含む9資産について、世界遺産委員会の文化遺産諮問機関である国際記念物遺跡会議(イコモス) の委員による 2000年1月 27日から5日間にわたる現地調査、そしてイコモス評価書(真実性の証明) で「考古学的遺跡の修理や修復について遺跡の真実性は確実に保持されている」などの「顕著な普遍的価値」の証明で登録がなされているからです。

京の内とは

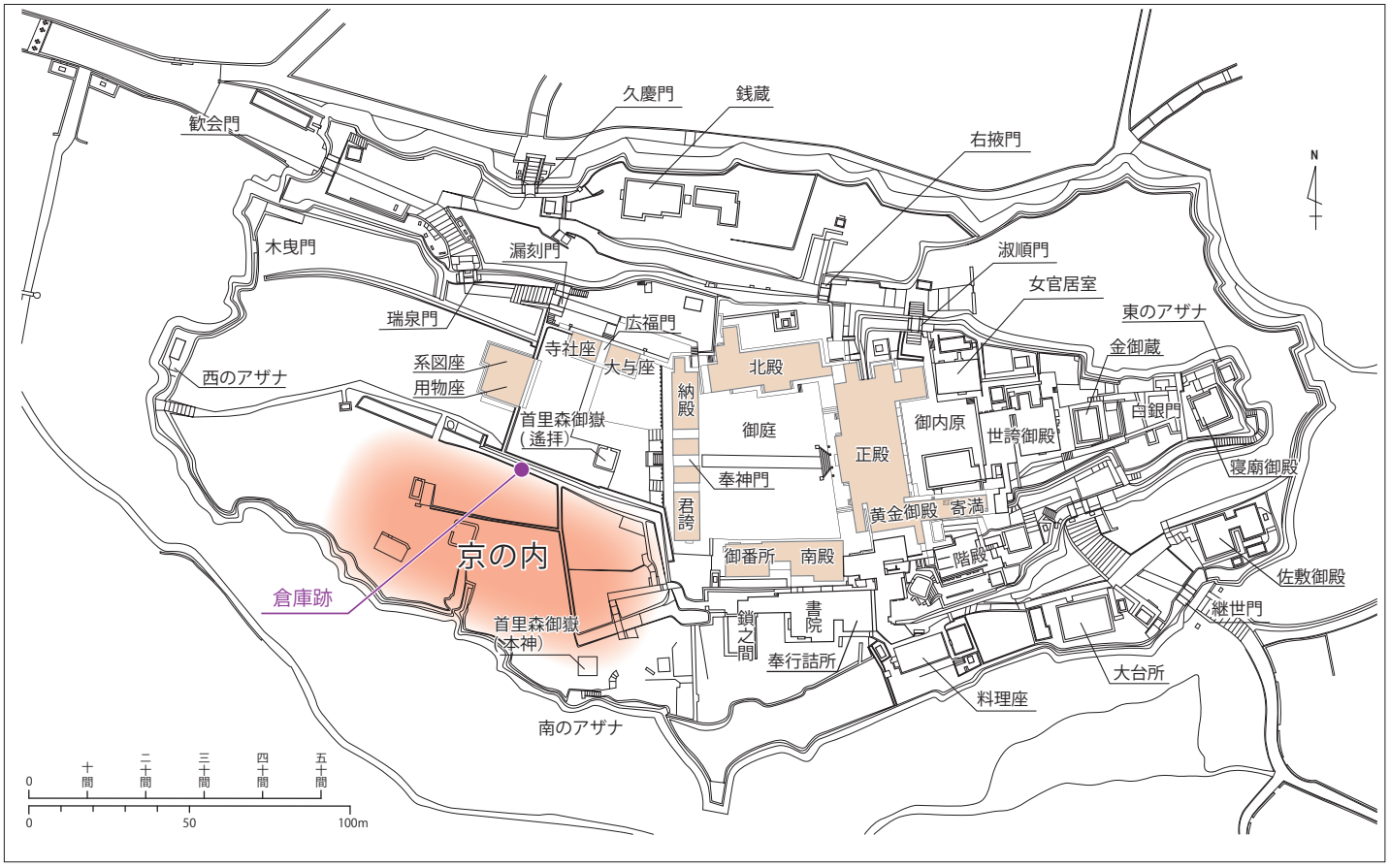
首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖域空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約 5,000 ㎡の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝の指示を受けた創世神アマミクが辺戸の安須森から最良の聖地を求めて南下しつつ、今帰仁カナヒャブ、知念森、斎場嶽、藪薩の浦原、玉城アマツヅ、久高コバウ森と巡り、首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくります。

京の内は、アマミクが最後に降り立った場所であり、琉球最高の聖域として認められた場所です。ここでの「京」は、霊力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に 10 箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたと考えられます。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、国王が末永く優れた存在であり続けられるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中にうたわれています。

このような背景から、京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。



横内家資料平面図（明治初期）をトレース・加筆

首里城平面図

展示概要・用語解説

展示概要

首里城京の内跡出土陶磁器は 1459年の火災で焼失した倉庫跡から出土しました。しかし、なぜ火災にあった倉庫跡と分かったのでしょうか？

この疑問を解くためには、『観察する』ということが重要になります。そこで、今回の展示では調査担当者になった気持ちで京の内跡を観察することを目的に、倉庫跡を原寸大のシートによって復元し、その大きさや陶磁器の出土量を体感できるよう試みました。また、一部の展示物には観察ポイントを紹介しています。

用語解説

遺　　物：人が加工した道具や食べた後のごみなど動かすことができるもの。

遺　　構：建物跡や古墓、溝など土地に痕跡が残るもの。

Ｓ　　Ａ：本図録では石積みのこと。
　　調査時に遺構の名称と種類を簡潔に表示し、管理しやすくするための記号のひとつ。

包 含 層：遺物を含んでいる地層。

標準遺跡：ある年代や型式などの標準となる遺物や遺構が出土する遺跡。

釉　　薬：陶磁器の内外面にみられるガラス質の原料となる液体。水を通さないためや装飾の
　　１つとして用いられる。

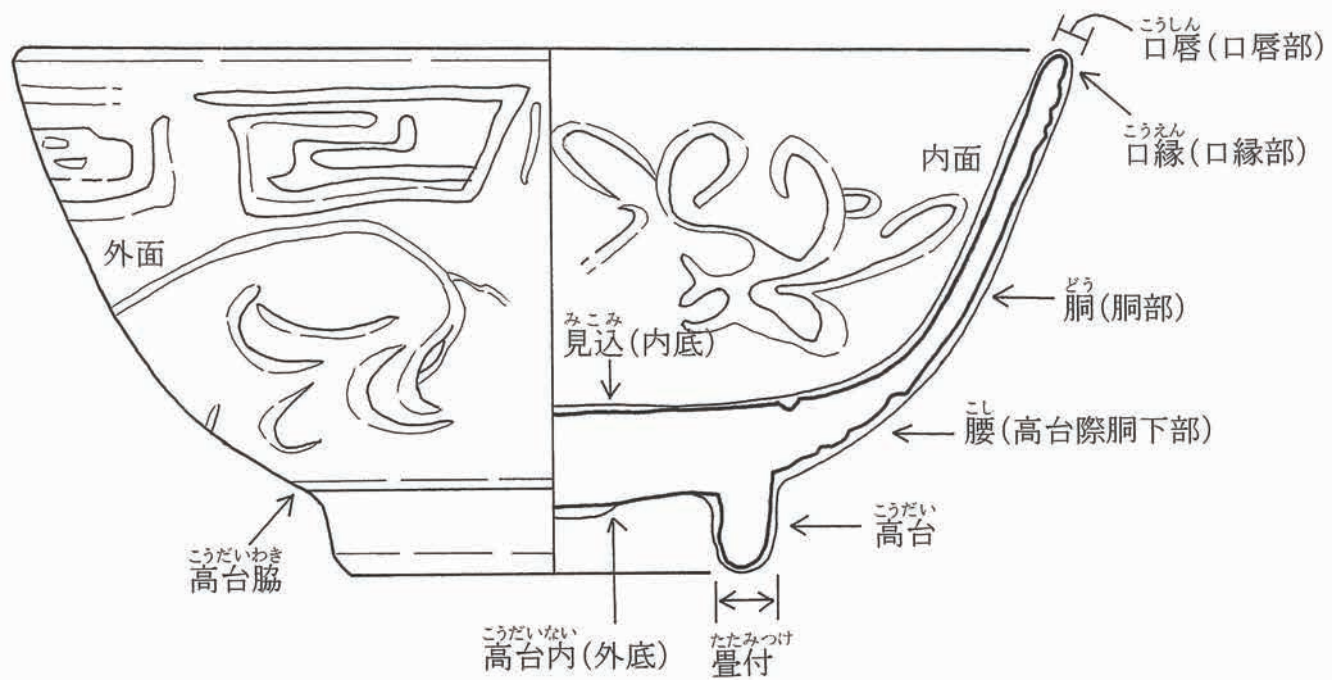
胎　　土：焼き物に使用される土。

鑿（のみ）　：石や金属の切断、削り、線刻時に使用される道具。

錐（きり）　：孔をあける際に使用される道具。

穿　　孔：孔をあける行為。

線 状 痕：加工時にできる線のような痕跡。



陶磁器（碗）の部位名称

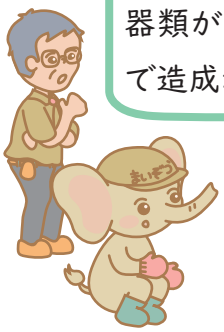
倉庫跡の検出①

首里城京の内地区の発掘調査（調査総面積：約 5,000㎡）は、平成６（1994）年度～９（1997）年度までの 4年間実施されています。平成６（1994）年度の調査では約 3ｍ四方の範囲内から、火熱を受けた陶磁器類の破片がまとまって廃棄された倉庫跡がみつかりました。

徐々に姿を現してきた多量の陶磁器片を見た瞬間、これは大変なことになったと心音の高鳴りを覚え、身震いもしました。発掘調査を進めると 14世紀中頃～15世紀中頃のものが多いことに気付き、これは貿易陶磁器研究において重要な資料で、陶磁器研究の標準遺跡になるものと実感しました。

調査班　主任専門員
金城　亀信

倉庫跡の検出状況

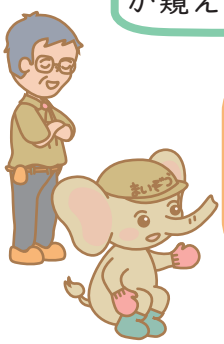


調査終盤には、約 60㎝もの厚さがある陶磁器類の包含層に再度圧倒されました。

包含層の中から土砂がみられないこともかなりの衝撃でした。この場所に陶磁器類が一括で廃棄され、その後、短期間で造成が行われたと判断できたのです。

厚さ 60cmってどのくらいかな？
ものさしで確認してみよう！

陶磁器の堆積状況



また、火災で焼けた陶磁器類の一部は南西約 15㎝の位置にあった石積みSA33・34まで運んで廃棄され、土砂や栗石で埋められるなど火事場清掃の様子が窺えました。

当時の人は焼けて壊れたたくさんの陶磁器を土で埋めて、綺麗にしたんだね！なんで火災があったと分かったんだろう？

石積み SA33・34 遺物出土状況

倉庫跡の検出②

発掘調査で確認された遺構の多くは保護のために埋め戻したり、調査後の開発によって失われてしまうなど、実際に見るということが難しくなります。今回、展示室の中央に倉庫跡を原寸大のシートで復元しました。実際に立ってみて、当時の調査現場を体感してみましょう。

西壁石積の一部
(南北の残存長 315m
高さ 40～ 65cm)

南から北に下る階段三段
(南北の長さ 105cm、階段の幅 197～ 212cm、高さ 40～ 45cm)

階段側面の石積
(南北の長さ 110～ 130m、高さ 45cm)

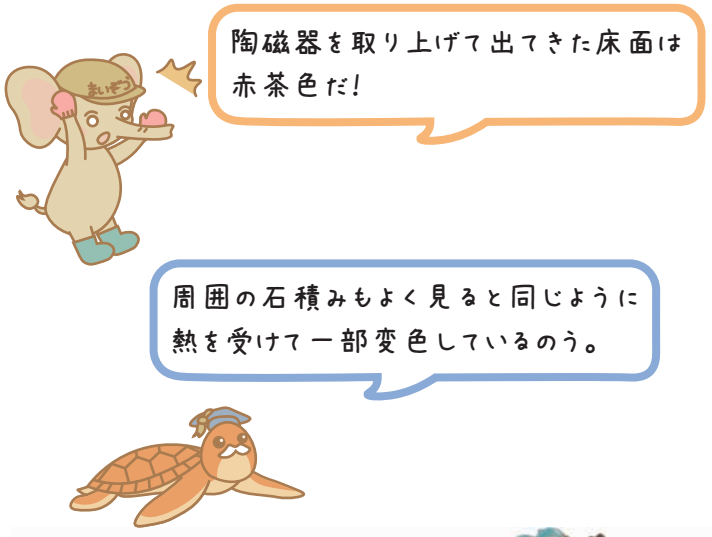
倉庫跡検出状況

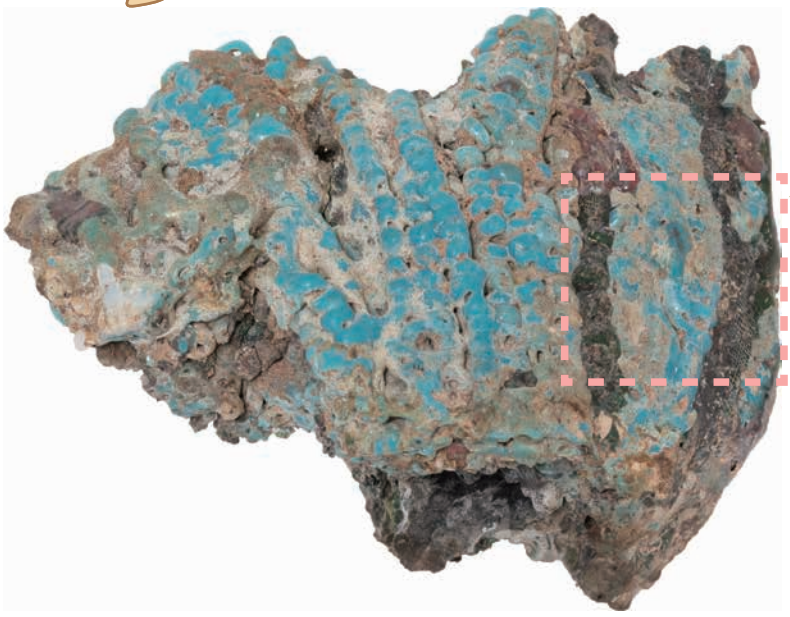
倉庫跡の床面は、廃棄された陶磁器等の遺物が岩盤直上まで堆積しており、判然としませんでした。また、後世の破壊もあり、残念ながら倉庫跡の具体的な構造や規模については分かっておりません。しかし、遺物の出土状況や琉球石灰岩を利用した階段、扉に使用されたと考えられる錠前が確認されたことから、倉庫跡と判断しました。

火災の痕跡

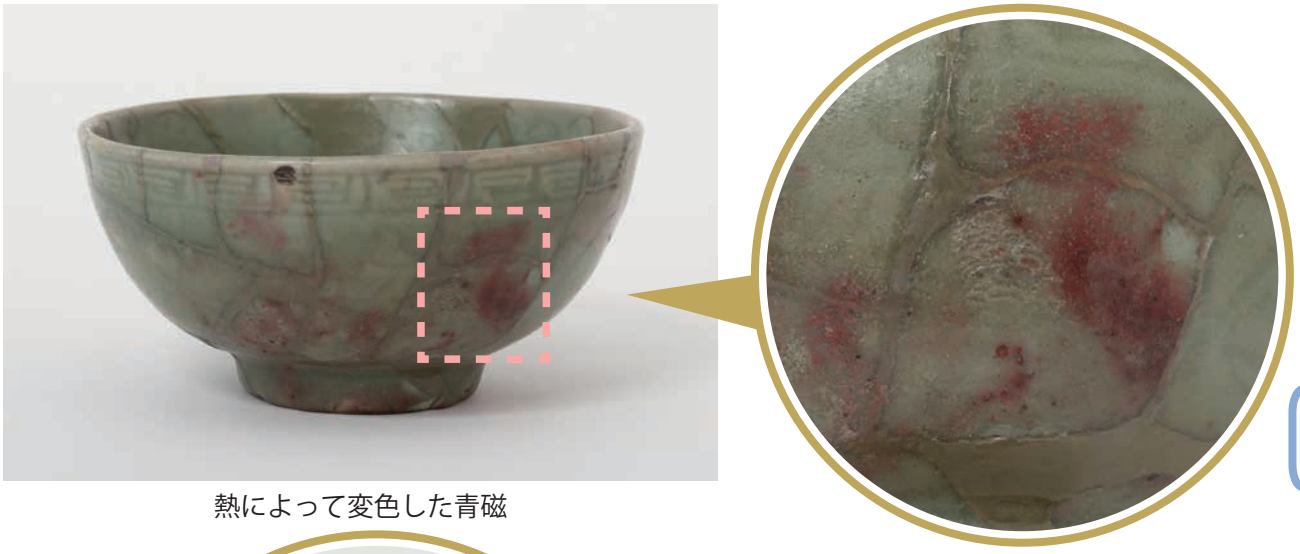
遺物をよく観察すると、製作技法やどのような環境に置かれてきたかなど様々なことが分かります。倉庫跡から出てきた遺物を観察してみると、煤(すす)が付着していたり、ガラス玉や銭貨は溶けてくっつくなど、強い熱を受けていることが分かりました。また、遺物を全て取上げると床面の岩盤が赤茶色に変色していたことから、倉庫跡は火災に遭っていたことが考えられました。

倉庫跡　床面の変色





繊維痕のあるガラス玉



熱によって変色した青磁

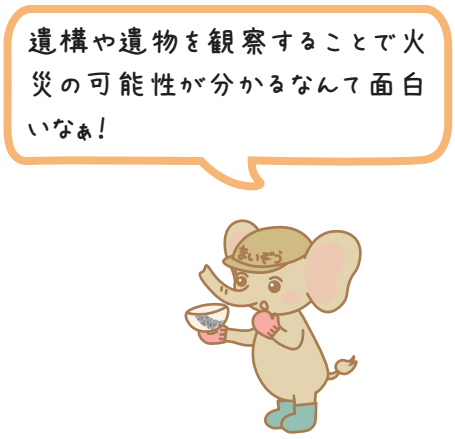
煤が付着した白磁

褐釉陶器片がくっついた小札・鎖帷子（くさりかたびら）

洪武通宝

被熱で溶けて変形した
洪武通宝の文字

溶解した銭貨の塊



復元された陶磁器

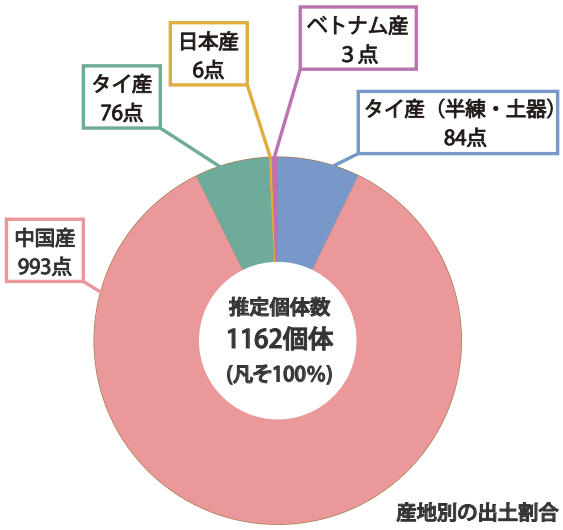
復元によって、倉庫跡にあった陶磁器類は1162個体と推定されました！

復元作業風景

発掘調査によって、倉庫跡からは陶磁器の破片が1463点出土しました。調査で出てくる遺物は割れて破片になっていることが多く、完形品で出土することはなかなかありません。そのため、調査後は破片同士をくっつけ、足りない部分には石膏を埋め、元の形へ戻していく復元作業を行います。

復元した陶磁器を産地ごとにみると、タイ産半練土器とその他土器(84点)、中国産陶磁器(993点)、タイ産陶磁器(76点)、ベトナム産陶磁器(３点)、日本産陶磁器(６点)でした。

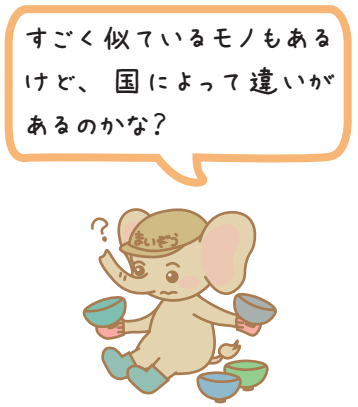
倉庫跡出土の復元された陶磁器



この中国産の「元青花八宝大合子」や「紅釉水注」は首里城京の内跡でしか確認されていない貴重な資料です。大合子はオードブルを盛る器のように使われ、水注は水などの液体を注ぐためのものです。これら資料を含む倉庫跡から出土したたくさんの陶磁器は祭祀や冊封使をもてなす際に使用されたと考えられました。

元青花八宝大合子

紅釉水注



陶磁器の観察

発掘調査で出土した陶磁器の観察ポイントはその種類や産地、年代によって異なり、技法や形で見分けられるものもありますが、言葉で表現するには難しく、雰囲気で感じ取る部分もあります。ここでは、そのポイントを掻い摘んでご紹介します。

中国産　青磁

表面の色が緑や水色のやきものです。沖縄から出土する青磁の多くは、浙江省西南部の龍泉窯だと考えられています。作られた時期によって特徴は異なりますが、京の内の倉庫跡から出土したものは、比較的釉薬が厚く、重量感があります。文様もヘラで削ったりスタンプの様なものを押したり、逆に盛り上がらせることで表面を飾ります。

中国産　白磁

青磁の胎土や釉薬から不純物を取り除き、白く改良されたやきものです。そのため、青磁とも白磁とも言える中間的な様相のものもあります。倉庫跡から出土したものは、景徳鎮窯系と福建産と考えられています。景徳鎮窯系は、素地が白くて薄く、釉薬が透明もしくは少し白濁しています。それに比べ福建産は、素地は厚みがありやや軟質で風合いが異なります。

中国産　青花(染付)

白地に、青に発色する酸化コバルトで文様を描いたやきものです。白磁の素地に施文をし、その上に透明釉をかけますが、釉薬がかかると全体的にほんの少し青みがかった感じになるものが多いです。京の内の倉庫跡から出土したものは景徳鎮窯のものになりますが、他の産地に比べ、素地は薄くて白く、青色が鮮やかに発色します。

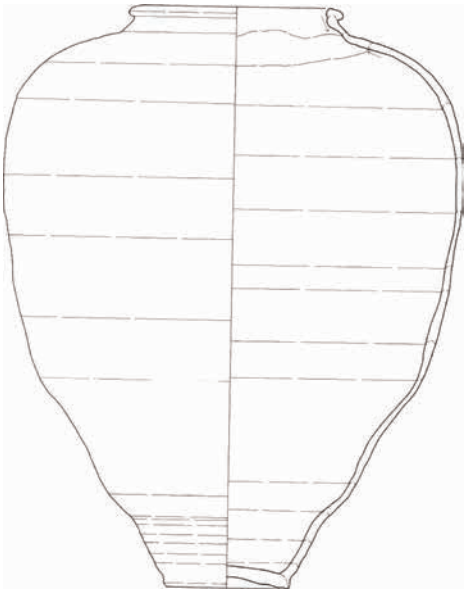
上段：中国産青花　下段：ベトナム産染付

ベトナム産　染付

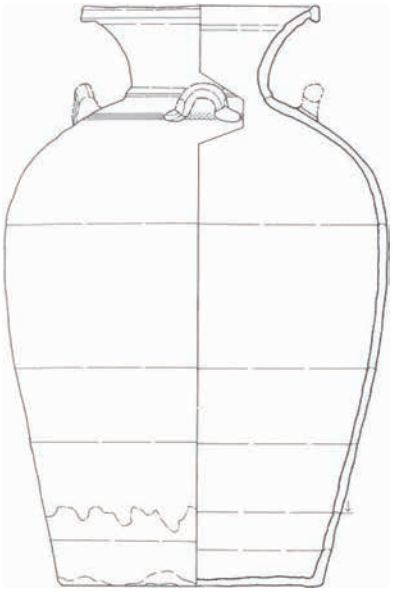
素地が軟質で陶器と磁器の中間の様な質感です。素地が白くないので表面に白化粧を施し、その上に文様を描き透明釉をかけます。このような技法で作られていますので、中国産のものに比べると透明感がない印象です。また、高台内に鉄錆を塗り茶色くなる「チョコレートボトム」という特徴もあります。

中国・タイ産　褐釉陶器

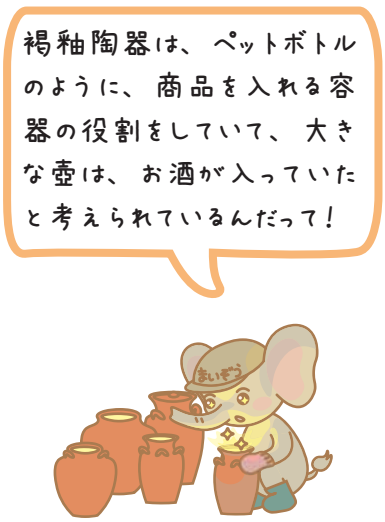
陶器に褐色つまり茶色の釉薬をかけたやきものです。沖縄で出土するものの多くが壺で、その中身が商品でその容器としてもたらされたと考えられています。中国産は内外面の全体に釉薬がかかるものが多く、比較的厚みも薄くなります。また、タイ産のものは口の部分の形がラッパのように開く特徴があります。この両者の破片を見分けることは、始めは難しいですが、経験を積むと段々わかってきます。



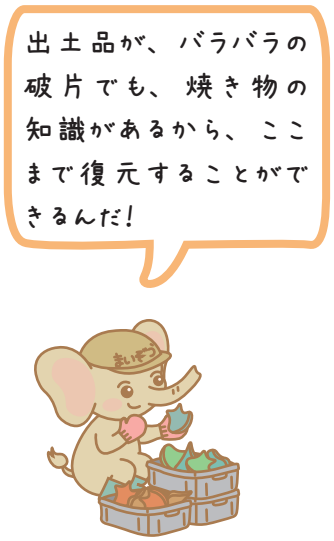
沖縄出土の
中国産褐釉陶器壺の代表的な形



沖縄出土の
タイ産褐釉陶器壺の代表的な形



中国産のやきもの



タイ・ベトナム産のやきもの

倉庫跡に迫る！

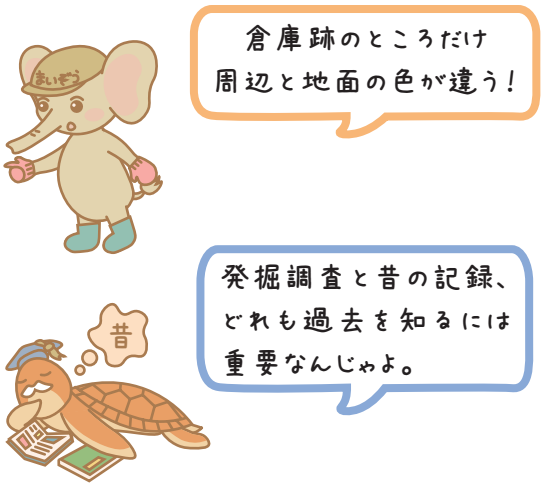
出土した陶磁器を観察した結果、中国産の青磁雷文帯碗と青磁連弁文碗の破片が多いことが分かりました。この２種類が 14世紀中頃～ 15世紀中頃に位置付けられていたことから、倉庫跡は 15世紀中頃のものと考えられました。そこで、この時期の首里城内の倉庫火災について文献史料を調べた結果、以下、２件が該当することが分かりました。

①琉球王国の正史『中山世譜』（註 1）「尚泰久王」の項で「景泰四年（1453年）尚金福王薨世子志魯将位時王弟布里・（略）・両軍混殺満城火起府庫焚焼」に起きた「志魯・布里の乱」

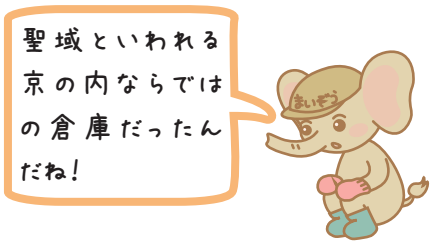
②中国明王朝の正史『明實録』（註 2）の英宗実録「天順三年（1459年）・（略）・本国王府失火. 延焼倉庫銅銭貨物.」

発掘調査では倉庫跡の床面や石積みの状態から被災面積は小規模であり、周辺の遺構には火災の痕跡が認められませんでした。このことから、単独の火災で被災した倉庫跡と判断し、被災時期は上記の②『明實録』記載の天順三年（1459年）として位置付けました。

倉庫跡完掘状況



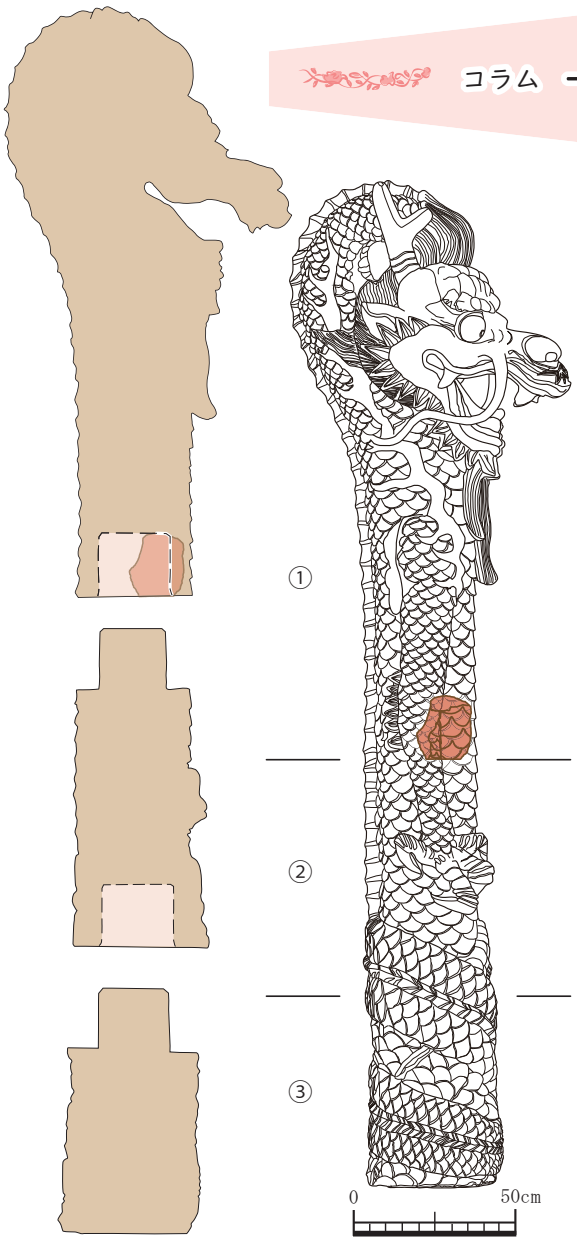
さて、倉庫跡から出土したのは陶磁器だけではありません。金属製品では香炉や鏡など祭祀に使用されたと考えられるものの他、倉庫の扉に使用されたと考えられる錠も出土しています。このことから、倉庫には扉があり、祭祀に使う食器や道具が大切に納められていたと考えられます。



銅鏡・香炉

錠・蝶番・鍱（かすがい）

コラム ー京の内出土の大龍柱の破片ー



1994(平成 6)年度の京の内地区の発掘調査で、継ぎ目や臍穴(ほぞあな)(接続穴)のある首里城正殿の階段両脇に設置されていた大龍柱の破片が出土していました(写真1～写真4)。この大龍柱の破片資料の裏側右半分には、臍穴をあける時の加工痕が観察できます。臍穴は最初に唐錐(トーギリ)(註1:回転式の手動錐(きり))によって孔があけられ、その後に鑿(のみ)を使用して臍穴を大きくしたようです。

正殿と共に平成4年に公開された大龍柱の復元と研究をおこなった西村貞雄氏に、この大龍柱の破片資料を観察してもらいました。その結果、正殿に向かって右側に設置されていた三分割(註2)で組み立てられていた阿形大龍柱の右腕中央付近から右側胴体部分の破片であることが判りました。さらに、京の内の大龍柱の破片資料は、1709年に謝敷宗逢によって製作された大龍柱(高さは 3.10mと推定)(註2)の可能性が高いとのことでした。　〈 金城 亀信 〉

《 大龍柱図 》

復元模型(西村貞雄氏作成の縮尺 1/5 の阿形大龍柱)を元に図化。
①～③は、三分割の推定。
赤部分は、出土破片の推定位置。

写真1 (右側面)

写真2 (正面)

写真3 (裏面)

写真4 (底面)

阿形大龍柱破片(細粒砂岩製。重量 3.02kg)

写真1. 鑿(のみ)で掘り込まれた鱗(うろこ)は、鑿跡が丁寧に磨き消されています。
写真2. 左側の出っ張りは腕になります。
写真3. 穿孔時に使用した錐(きり)や鑿の痕跡があります。
写真4. 三分割の継ぎ目の面となる部分は、鋸屑(のこくず)きによる線状痕と接合時に使用した漆喰が付着しています。なお、接合用の臍穴の復元直径は約 26cm を測りました。

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

一　土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの

二　銅鐸、銅剣、銅鉾その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

三　古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

四　宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの

五　渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○国宝及び重要文化財指定基準、・(中略)・基準（抄）(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会 告示第 2 号)〔最終改正〕平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

（考古資料の部）

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　　518 点

附　一、金属製品　　一括

附　一、ガラス玉　　一括

所　有　者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（庁保美第３の３号平成 12 年６月 27 日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文：　　尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成６～７年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順３年 (1459) に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶･磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に２点と景徳鎮窯跡出土の破片１点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」(訳文の趣旨) とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年６月号より抜粋）

※ 官報告示：平成 12 年６月 27 日付け文部省告示第 120 号

※ 文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 27 条第１項の規定により、平成 12 年６月 27 日付けで重要文化財に指定。

重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財　考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　518点

附（つけたり）　一、金属製品　一括

附（つけたり）　一、ガラス玉　一括

重要文化財 陶磁器内訳

種　類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁（せいじ）（289点）	碗（わん） 103	皿（さら） 117	盤（ばん） 32
	壺（つぼ） 20	大花瓶（おおかびん） 2	馬上杯（ばじょうはい） 1
	水注（すいちゅう） 3	瓶（びん） 5	香炉（こうろ） 3
	水滴（すいてき） 1	花盆台（かぼんだい） 1	大鉢（おおばち） 1
白磁（はくじ）（33点）	碗 14	皿 11	杯（はい） 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付（げんそめつけ）（2点）	馬上杯 1	大合子（おおごうす） 1	
明染付（みんそめつけ）（58点）	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵（いろえ）（3点）	碗 2	皿 1	
紅釉（こうゆう）（1点）	水注 1		
瑠璃釉（るりゆう）（2点）	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器（かつゆうじき）（1点）	碗 1		
褐釉陶器（かつゆうとうき）（35点）	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋（ふた） 1	特殊壺 1	
	蓋（ふた） 1		
白釉陶器（はくゆうとうき）（3点）	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器（さんかつゆうとうき）（55点）	壺 55		
タイ産半練土器（さんはんねりどき）（22点）	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器（3点）	瓶 1	水注 2	
備前ほか（本土産）（6点）	擂鉢（すりばち） 1	甕（かめ） 3	壺 2
瓦質土器（沖縄産）（5点）	蓋 5		
合　計　518点			

首里城京の内関連年表

1500　1400　1300　1200

中国	明	元	南宋
琉球	第二尚氏 / 第一尚氏 / 察度王統	英祖王統	舜天王統

京の内の遺物

青磁雷文帯八角皿(中国)
青磁牡丹唐草文水注(中国)
青花牡丹唐草文梅瓶(中国)
青磁口折蓮弁文皿(中国)
青磁牡丹唐草文盤(中国)
青花八宝文大合子(中国)
青磁口折蓮弁文皿(中国)
青磁吉祥字文壺(中国)
青磁双耳唐草文瓶(中国)
青磁高足杯(中国)
ベトナム青花花唐草文面取瓶(ベトナム)
青磁口折印花双魚文皿(中国)
紅釉水注(中国)
青磁蓮弁文壺(中国)
備前焼壺(日本)
青磁牡丹唐草文大花瓶(中国)
青花龍文高足杯(中国)
褐釉陶器四耳壺(タイ)
青磁雷文帯碗（中国）
青花松梅樹文双耳花瓶(中国)
青花牡丹唐草文壺(中国)
五彩菊花文碗(中国)

中国・沖縄の主な流れ

六〇七　隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣
―南宋から元にかけて陶磁器の輸出がめざましくなる―
―中国江西省・景徳鎮の台頭―
―この頃、景徳鎮で青花(染付)磁器が完成する―
―この頃、景徳鎮で五彩色絵が創作される―

一三五〇　察度、浦添按司から中山王となり首里へ
一三六八　明が興る
一三七二　中山王察度、はじめて明に進貢
一三八〇　山南王承察度、明に進貢
一三八三　山北王怕尼芝、明に進貢
一三八五　明の太祖、中山・南山両王に海船贈与
一三八九　察度、朝鮮(高麗)と通好する
一三九二　閩人三六姓、渡来と伝わる

一四〇四　冊封使、はじめて来琉
シャム(タイ)船渡来し交易
一四〇六　尚巴志、武寧王を討ち父・思紹を王にたてる
〈察度王統滅亡、第一尚氏興る〉
一四一六　尚巴志、山北王攀安知を討つ
一四二〇　尚思紹、シャムに使を遣わす
一四二一　バレンバン(インドネシア)との交渉はじまる
一四二七　龍潭を掘り安国山を築く
一四二九　尚巴志、三山統一

一四五三　志魯・布里の乱が起こり、首里城炎上
―五彩の手法が中国・民窯で盛んになる―
一四五四　尚泰久の即位
一四五六　冊封使の李秉彝ら来琉
一四五八　万国津梁の鐘鋳造
一四五九　首里城京の内倉庫が炎上
一四六三　マラッカへ使者を派遣
一四七〇　金丸(尚円)即位
〈第二尚氏王統始まる〉
一四七七　首里城歓会門、久慶門の創建
一四九〇　パタニ(タイ)と始めて交易
―この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める―
一五〇一　玉陵を築く
一五〇八　首里城北殿の創建
一五二九　首里城守礼門の創建
一五七〇　南方貿易の記録途絶える

日本	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代

主な引用

倉庫跡に迫る！

註１．沖縄県教育委員会『蔡温本 中山世譜』1986年

註２．日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料 明實録之部１』国書刊行会 1979年

コラム―京の内出土の大龍柱の破片―

註１．小野まさ子「船作事について－吉田真栄氏よりの聞き書きをもとに－」『西表島船浦スラ所跡－港湾施設用地工事等に伴う発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第 101集 沖縄県教育委員会 1991年3月

註２．-a. 西村貞雄「首里城正殿大龍柱 (縮尺 1/5) 復元経過について」『首里城正殿予備設計報告書』沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 昭和 63(1988) 年 3月

-b. 西村貞雄「龍柱について」『琉球大学教育学部紀要』第 33集 第 1部　1988年

-c. 西村貞雄「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」『琉球大学教育学部紀要』第 42集 第 1部 1993年 3月

-d. 令和 2年 2月 26日に西村貞雄氏に京の内出土の大龍柱の破片を観察して頂いた際に「大龍柱は頭部・胴部・尾部(尾の巻付け) 三分割で製作後に三つ部位を連結して組み立てた。」ものと教示を頂いた。

参考文献

・今井敦(編)『中国の陶磁第４巻　青磁』平凡社　1997年 4月

・上原 靜「琉球文化の象徴・首里城正殿－首里城正殿跡の発掘調査－」令和元年度 特別企画展「首里城正殿跡出土品展」沖縄県立埋蔵文化財センター第 83回文化講座　2020年

・沖縄県教育委員会『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)―』沖縄県文化財調査報告書第 132集 1998年３月

・沖縄県教育委員会 文化課 (編)『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群』「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会　2001年

・沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 49集　2009年３月

・當眞嗣一「首里城炎上と世界遺産」『琉球弧世界遺産フォーラム』ニュースレター vol.14 琉球弧世界遺産学会　2020年

・下中邦彦 (編)『世界考古学事典(上)』平凡社　1979年

・出川哲朗・中ノ堂一信・弓場紀知(編)『アジア陶芸史』昭和堂　2001年 11月

・中沢富士雄・長谷川祥子(編)『中国の陶磁第８巻　元・明の青花』平凡社　1995年 12月

・蓑豊(編)『中国の陶磁第５巻　白磁』平凡社　1998年９月

・森 達也「琉球王国時代」『南島考古学への招待／沖縄考古学会 50年』④ 沖縄タイム ス 2019年 11月 22日 (金) 文化 15面

文化講座

・首里城京の内跡出土品展講演

「陶磁器観察のポイント」

実際に手に取って観察できます!

講師：当職員 玉城 綾

・世界遺産登録 20 周年特別記念講演

「遺物から解明した龍柱の形態について」

講師：琉球大学名誉教授 西村 貞雄 氏

日時：令和 3 年2月14日（日） 14:00 ～ 16:00

会場：当センター 研修室

定員：50 名 ※先着順　受講料：無料

予約受付期間

2月2日（火）～ 2月5日（金）

9:00 ～ 17:00 ※電話受付のみ

☎ 098-835-8752 調査班（教育普及担当）

沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日　月曜日（国民の休日・慰霊の日にあたる場合は振替）、
国民の休日（こどもの日・文化の日を除く）、
年末年始（12/28 ～ 1/4）、慰霊の日（6/23）
※その他臨時休所あり

開所時間　9：00 ～ 17：00
（入所は 16：30 まで）

住所　〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

電話番号　☎ 098-835-8752

新型コロナウイルス感染予防に
ご協力お願い致します。
詳細は当センターホームページで。
沖縄県立埋蔵文化財センター